

前号作品の感想

河合俊郎

在京同人会の割当てには「前号作品評」となっていたが、批評を感想と改めた。その理由を先に書く。「批評とは他人をダシにして己を語ることである。」といったのは小林秀雄であったが、己を語ろうとしなくても、己をさらけ出してしまふものである。慢性恥辱症のわたしは、とうてい他人さまの作品を批評するがらではない、と己にいいきかせていたので感想と改めた。

前号で宮田正平は「仙石の詩は総じて分かりにくい。」と書いている。近ごろの若い人の作品で、わかりにくい作品によく出会う。そういう作品に対する不満の声もよく聞かされる。しかし、詩というものは人の心の深層にひそんでいるもの、常識的なことばではない

い表しにくいものを表現する場合があるから、わかりにくくなりやすいと思う。現代人の生活様式の変動はかつてない急速な激しさで変わりつつあり、科学のもたらした新しい驚異的な想像や夢が拡散され、歴史上かつてなかった根本的な変化を強いられている。昔のような常識の世界ですぐに了解のつきやすい時代ではなくなった。

仙石まことの「飛行へ」はおもしろいと思う。この詩人の現実、想像力と感性との冒険に挑んでいる。終始一貫して立ち向つていくところがいい。擬声音やプロメテなどの繰返しは少しくどいと思うが、これも新しい実験と思えば気にならない。生真面目で、リアルで、非のうちどころのない作品よりもはるかにおもしろい。

わたしの友人で文芸評論家のKはいつも次のように断言する。複雑でとらえ難い現実であるからこそ、詩人はこの現実をより正確に把握しようと努力すべきで、表現者としての責任を全うすべきではないか、と。そんなことはわかっている。それよりも詩人がいかにしてこの正論から脱皮することができるか。理屈ではない具体的な方法論の飛躍が欲しいのだ。生真面目なクソリアリズムには飽いて

きたのだ。

多分寺田透であったが、近代詩の期間を、松岡国男（柳田国男、一冊の詩集あり）から萩原朔太郎までだと規定していた。この時代の詩で最も重要視されたのはレトリックであった。詩人の個人的存在にからまる問題をこぼで表現するための修辭法にすぎない、そのことが、朔太郎以後の現代詩にまで連なっていて、個人的感情がこぼを搜索している。モノローグの言葉がメロディに支えられ感情をつき出しているといつていい。そのような流れを感じさせられる作品は、前号では伊藤正斉の「未明と暮のあいだ」であり、押切順三の「紋章のある風景」である。たしかにうまい。巧まざるうまさであるが、未知の冒険がない。

自分にとって詩とはいったい何であるか、ということとは生涯つきまとう問題であろう。「コスモス」の詩を読んでいつも感じることは、詩とはこんなに軽く書き流されていいものだろうか、という思いである。まるで、随筆か私小説を読んだように軽く、日常からフッと浮いていて沸騰してこない。例えば緒方宗平の「公園にて」や坂上清の「水色の太陽」などは、清らかな水を呑むように、すう

四十年

緒方宗平

春とは名ばかりの
東の空が
うすくしらみ
凍てつくようにさむく、
九〇才になった母は
四〇年前に戦死した
弟のことを口にして
ふたたびひらかぬ
喉をとじた。

そのとき
私は
山岳重畳
中国北部の
どこともわからぬところを
さまよっている
青白い人魂に
母を託した

つと軽く咽喉をとおつてしまふが、毒にもならず薬にもならず、ただそれだけの随筆的作品であるように感ずる。

詩人アーノルド（英、一八九五—一九四五）は「詩は人生の批評である。」ということばを残した。この意味をわたしは単純に受けとめて Criticism と解し、詩の中の批評性や皮肉や諷刺をも含めて考え、これを下敷きにして前号を改めて読みなおすと、ほとんどの作品が人生的であり批評性をもっているのに気付く。個人個人の手法、表現技術の違いがあるだけのように思われてならない。

今の日本の現実状況の中には詩人の批判すべきことが多い。軍拡・公害・医療ミス・教育等、数えるときりがなく、裁判だけはと信頼したいのに、そこにもドグマがあり、政治化があり、質的低下に眼を覆いたくなる。このような状況の中には、詩人の反逆精神のモチーフはいくらでもころがっている。そのことにも関係して、どの作品にも、コスモスの反逆精神のない作品はなく、伝統的共通性のように読みとれる。ただ、どの作品が文学として手垢のついてないことばであるか。在来の詩語をどれだけ拒否し得ているかである。この号でわたしが最初に注目したのは、木

現実の「電話」であった。この自由で簡潔なことばの放出のなかで、木原は大きく変ってきた。わたしは不自由な手で描いたクレヨン画「落葉の森」を見た時と同じ感動を覚えた。色彩を失った世界から色をとりもどすように、言語を失った世界からことばをとりもどす時の新鮮な感性のおどろき、スリリングな冒険の中でことばを獲得してゆくイメージのむこうで電話が鳴りひびくのである。

このことを、もういちど最初にかえつて考えてみると、仙石まことには、やはり日常現実とか論理とかいうものから解放されたい感覚的思考の渴望があり、それを具体的に表出すれば「飛行へ」のような作品にもなるのである、そこには思考の秩序もある。同じように木原実には木原実の渴望があり、それぞれ違う詩を支えているのである。「電話」に注目したのもこういう意味であり、今までにない思考秩序と表現方法の飛躍がいい。

「詩は総じて分かりにくい。」というとき、すぐに超現実的な脈絡のないイメージによる觀念化だけを考えないで、現実とか論理とかいうものから解放されたい感覚的思考から生まれる詩もあることを、仙石の詩を例にして見て見たまでである。

江界 四

石榴の花

申 有人

ことばの影が
夜の河にうかんで
こえなく 彷徨よい
陵遅処斬の亡骸は
闇に包まれて
夜の河に投げこまれ……

いまも
わたしは他人^{ひと}から借りてきた
ひと握りのことばで
だれも知らぬ 自分の

魂のこえを伝えようと
身悶えすることばを
膏汗たらしめて搾り 絞めあげ
あげくに 息絶えて
眩きも聴えぬ。

見つめあう
たがいの瞳のおくで
遠い軌跡をたぐりよせ
女の眼に

盲いたことばが
真夜中の星より鮮かに閃いて
遙かな私の「不在」を照射する。
ああ だれが知ろう

全羅道 谷城に一輪
石榴の花の紅を

最初の露のときめきに
震える膝は
静かに割れて
麝香草の奥ふかく棲む

花蛇の淡紅に燃える肌
濃やかな原初の生にぬめり……

——見て この眩しい星たちを
みんな あなたの若い血が
いのちがけて産んだものよ
もう わたしを放さないで
離れることは あなたの死

囁く女を

やにわに崖からつき落し
振りかえらず わたしは
海峡を渡った。

きみはぼくの死

「追放者」の消印だけが
きみの涙を

客地のぼくに伝えてくれる。

モンsoon

長谷川七郎

防波堤にそって
車地^{クルマジ}のように 根を生やして動かない
前世紀の大砲がならぶ
植民地なごりの要塞地区
ヤシ酒の酔いざましで
崩れた城壁跡の 門をぬけたあたり
インド洋の落日に気をとられている間に
振りむくと 黒い雲がかぶさってきた
木かげをもとめて 足をはやめると
固形潤滑剤の黒鉛に似た
乾いてすべっこい 女の手が
はずみをつけて引きもどした

足もとの草むらから アベックが
湧いて出たと思ったら
崖っぷちで抱きあっているのや
砲台から筒先にまたがって
いちやついているものもいる
スコールの合間を縫って
ゆっくり 茶臼^{チャウキ}回しのヒップも横ぎる

*

黄色い弔いの小旗が町にあふれ
雨のさ中を
喪服の女たちの行列が
海岸から 仏花^{ブツバナ}の植え込みのおくの
古い寺院に吸われていく
ココヤシの林から
しめった太鼓の音が木だまする

芝生に引きあげられた
張出し浮材^{アトラリガ}をつけた漁船
雨をともなった はげしい北東の季節風^{モンスーン}

が
ひよろながいヤシの幹を
くの字形に曲げてゆきぶり
沖の珊瑚礁に白波を立て
内陸からインド洋に吹きぬける

生がわきの砂浜の日照りに
裏おもてをひっくり返し

肌焼きに精を出す 白ブタに似た太っち
よの

オランダ フランス イギリスの女たち
海浜看視所の胡乱^{ウラン}な目をくぐりぬけ
きまった時間にやってくる 地の女が
ビキニの胸あてをはずして 合図にうち
ふる

浅ぐろくひきしまった裸の胸に張りつい
砂糖海岸^{シュガビーチ}の白砂が
ゆさぶる乳頭からこぼれおちる

箱庭

木原 実

山のしたには藁屋根を
藁屋根に燃えるいろり火

(あら、ほんものそっくり)

夢にのこる村里の

道は九十九折れ

九十九折れには苔を植えよう

○

ゆっくり始動する「こだま」の車窓から

ぼくは東京の街を眺望した

夕映えのビルは

遺跡めいてすでに墓標の群落

人はこの墓標のために働いた

風の落ちた舗道を

人がいま帰ってくる

澄んだそらの夕焼けをみて

街かどから電話をかける

ボックスはどこにも人がいて電話をかけ

ている

ぼくはポリ容器の茶をのみ

プラスチックの弁当をあけた

魚肉ひとときれ ひかるウインナ 甘った

るい卵焼き かまぼこ

赤い豆

列車がスピードを増すと

黒い富士が近づいてきた

○

月がのぼる

背をまげて九十九折れをたどる

涸れた川をまたいでゆく

戸を開かず藁屋根の戸口では

かぼそい膝を折って

祖母が箕を振っている

月の下に余念なく

祖母は箕のなかの実を選ぶ

立ちつくすばくの足もとに

月が濃い影をつくる

○

雪の富士

ぼくらは夜通し歌仙を巻いた

凍雪にきしむ棟木

奥深い土間の薄明り

(ほんとうを言えば危い屋根の下)

死んでしまった柳人中島国夫

あなたは何が言いたかったのか

○

氷雨が箱庭をたたく

猫がきてたちどまる

こわれた箱庭にたたずんで

猫に眺められる

はなしの自由席

仁川と江界の距離

—— 申有人に。同じ題名で ——

村松 武司

前の首相の鈴木善幸がアメリカを訪問した
ときのことだ。カーター大統領との会談で、
東洋的に不得要領の話をしたのかもしれない
が、鈴木の影響を、ニューズウィークの記者
(あるいは編集者)が、たしか「愚鈍」とい
う言葉で表現したことを憶えている。

わたしはこの愚鈍に、とくに異論はない。
しかし積極的には何もやらずに自分で首相の
座を降りてしまったこの人なりの見識に、わ
たしは奇妙な親近感をおぼえる。首相に就任
するやいなや、アメリカやヨーロッパを訪問
する従来の国際外交の慣習のなかで、最初に
東南アジアを訪れたのは注目に価するアジア
的識見とも思う。ニューズウィーク誌の見解

は浅く単純だ。

一方でわたしは思う。ひとつの国の国民の
平均的見識のレベルは、その元首の限界を超
えるものではない。右の例でいえば、ニュー
ズウィークの記者は、他国の元首を愚かとい
うのは自由だが、その後、喜劇的な誇大妄想
狂のレーガンを同時に戴いてもいる。たとえ
国内においてレーガンを彼が認めようと、あ
るいは批判する立場にいても、他国民
からのレーガン批判から彼ひとりだけが愉快犯の
ように逃れられるものではない。つまり、他
国の元首なり権力なり体制を批判するならば、
自分が同時に戴いている自国の元首、体制な
りへの、どうにもがまんならないやりきれな
さを、他国の民衆と同質に体験しながらの批
判でなければならぬはずだ。これを別の座
標に移して、かりにプロレタリア国際主義を
例にあげて、被圧迫者どうしの連帯性をあげ
つらうとしても、右のことをぬきにして、楽
天的な責任のがれはできるものではない。

いま朝鮮民主主義人民共和国では、金日成
の子息の金正日に権力が委譲されようとして
いる。この日本にも準備の政治的キャンペーン
が盛んに行われ、先日、共和国の国内にお
いてはユニークに、息子の指導力が民衆の尊

敬を受けつつある、と報じた新聞がある(朝
日新聞)。なんとぼかしたか、と日本では
多くの人々が、そしてわたしが思う。しかし
そのことよって、わたしは共和国の民衆を
いささかも愚かとは思っていない。

理由は二つある。ひとつは、民衆がいつの
日か、社会主義国家における「王朝制」打倒
のために当然たたかうであろうという予想。
さらにもうひとつは、かりにその予想が裏切
られ失敗したとしても、わたしが共和国の民
衆を愚かという権利の一片も握っていないこ
とによる。わたしたち日本人は、認めようと
認めまいと、いまだに天皇制の存続を許して
いる。どうして社会主義の他国の二代「王朝
制」を笑うことができるか。その民衆を笑え
るか。

申有人が「コスモス」39号で「仁川と江界
の距離」を書いた。わたしの「コスモス」の
「死んだ港」と「季刊三千里」に書いた「作
戦要務令の悪夢」(ともに同じ内容の詩とエ
ッセイ)についての批判であった。申有人だ
から批判を加えることができたと思う、する
どい深いものが存在する。その最後のところ
で申有人はつぎのように言う。

（村松のいう在日朝鮮人の狂気とは何だろうか？ ロジカルに言えば、抑圧される側に生きる人間のバトスを指す言葉であろう。エートスの側に生きる人間は狂気を避ける——たとえば中産階級と自認する大部分の日本の小市民が希うように、一見平和に思える自分たちの生活を狂気（変革）で破られたくないのだ）（その「一見平和に思える」日本の生活の中で「新しいインチョン」が誰にも知られず造成されている事実を、村松の詩は東京の空と仁川の空を重ね合わせることで見せてくれる。その詩人がなぜ狂気を避けたいのだろうか？ わたしには理解できない）

申有人はわたしのながい半生（戦後から三十八年）に、じつに適切なメスを加える。へわたしにはおまえが理解できない」という距たりの感じさせる事実は、わたしに苦い。右の批判は、わたしが知っていて、じつはいまだにできない、あるいは決して成就することは不能な事柄を指している、と最近思う。在日朝鮮人の友を多く持ち、いっしょに泣いたりわめいたり、その程度の「狂気」ならば、一時のものにせよ屢々ある。しかしたとえひとりにせよ、朝鮮人の悲しみや苦しみを、わたし

しが替って負い、生きることの不可能をしみじみと思う。個人的な感慨にひたっていても仕方がない、もっと事実に触れよう。

「死んだ港」で個有名詞を出した少女は、「千葉へ行く」と言った。実際は「トルコ街の」の日本の終点、あるいは始点がそこにある。その場所が栄町であろうとどこであろうと、特別に変った怖ろしい地獄でもあるまい。人間はどこにでも生きていくし、身を売って生きるものが人生の墮落であるわけもない。しかし、わたしが自分の降りる駅で彼女を降ろし、一晩でも休ませようと思ひ、そしてできなかった無力、薄情。それもつらいが、一日休ませてあと、どう力を藉すことができるか？ その絶望感には拭えない。申有人はわかるだろう。そしてわたしの柔弱を笑うだろう。このような例は、あなた個人の歴史のなかではゴロゴロころがっていたはずだし、いまだに身辺に珍らしい話題でもないはずだ。その珍らしくない在日経験をしたかうパトスと、たつた一晩の経験だけで無力感を味わう中流意識の日本人の心境との相違が、「狂気の」を避けた」というわたしの表現になる。そして実際いえば、いまこままでわたしの

せいぜいの朝鮮認識だろう。詩もエッセイも、いずれもわたしの限界を示すのが目的であった。そのことを見据えたいうでの「われわれの運動」を考えたかった。

わたしは日本人の一人、そして申有人のいう小市民の一人だ。その立場にいて、わたしは小市民性を壊してゆかなければならない。自分の場から、空中に浮かんだ仮設の現場に舞いあがって、在日朝鮮人問題を語るつもりはない。そして日本人の立場から離れて、朝鮮を語るつもりもない。その意味でいえば、申有人の詩も、朝鮮人の立場で戦時の日本を歌い、在日の立場で戦時下の朝鮮を歌う。いまだに存在する「日本の侵略性」は、国連監視団が見てきて語るというような性質のものではなく、申有人が自らを語るしかない。

あきらかに相違するものを、いそいで同意同調してはならないというのが、民族運動のすすめ方であつたと思う。申有人は「わたしには（村松の言葉や行為が）理解できない」という。申のかなしみであり、わたしのかなしみだ。この、同質の主題に関わる無限の距離の発見が、じつは近きだと思ふのだ。

その人に

想い出すこと 二

松永浩介

清水俊夫 新潟県出身、戦後東芝堀川町の医師となり東芝争議に参加。24年東芝退職後救済会子安診療所を開設。健康を守る会運動や、労働争議、大衆行動の救援、救護に活動、神奈川民医連を組織し、初代理事長、共産党員、昭和35年10月2日病死、享年四十六才、（合祀者名簿より）

何時頃から知り合ったのか思い出せないが十月十五日の合同葬に参加し、別席の追悼会で詩を朗読している。出席者はほとんど医者でその中には知り合いが何人かいた。清水さんは心臓病で急死されたのだがその席ではガンの話題の中心になってきた。私はガンと判った時に医者は患者に病名を報らせるのか、最後迄かくし通すのかとたずねた。「自分としては病名を知らせてもらい、余命を精いっぱい闘って死にたいと思っているのだが」といって、……「それはむずかしい問題ですよ」

と一人の医者が話してくれた。

あるガン研究の大家が弟子に平素から「私はガンの専門家だから、もしガンになるようなことがあつてもその時はかくさずに報らせてほしい。私は科学者として冷静に対応するから決してかくさないでくれ」ときびしく教えていた。その先生がガンでたおれた。弟子達は何度か討論した結果、教えを忠実に実行してガンであることを報告した。然しその先生が臨終の際に「やはり知らない方がよかつた」と洩らしたという。

質問した私の意識下に中井兆民の「一年有半」があつた。健康であるからこそそんな質問が出たのだろう。

中野重治が「折り折りの人」で淀野隆三との対話を書いている。中野が東大病院の人間ドックというのへはいって淀野に出逢う。

「ガンになつちやつてねえ……」

「そうか……」

「君はどうしたんだ……」

「ドックだ……」

彼の治療時刻があるのでお互い病室を教えあつて私たちは別れた。するとある晩彼がやってきた。そして医者以外通つてはいかぬらしい廊下を通つて、勝手知つたという恰好

で彼は私を彼の部屋に連れて行つた。ガンの話、ガンで死んだ知合いの話が出る。

「しかし文学者に隠しておくという法はないよなア。文学者だものなア……」

私は賛成したが、私に動揺がないだろうというのではない。医者に干渉しようというのではさらにない。（わが国、わが国びと）

私は大工を職業とするかたわら詩を書いてきた一介の市民である。「文学者」といううぬぼれはもっていない。

「絶対」はないとたれかがいつたそうだが一つだけある。それは「死」だ。私は病気になるつも十分な医療をうけるような金のない結構な身分である。その時にはチタバタしないでひっそりとさよならしたいと思つているが、これもいまを健在でいるからの強がりかも知れない。

その人に

（清水俊夫先生の合同葬にて）

今はないその人に
話かけたい想いが湧いてくる

うねりの大きな道程を

ひとすじに貫き通し
そして突然たおれた人

肉体を病む人達にとりすがられ
心の支えを失った人達に求められ
それら廻りから厚くかこまれていた人

ある時の強い怒り

ある時のいい知れぬ深い悲しみ
その訴えようのない悩みを悩みながら
キラリと光る眼がねのそこで
いつもほほえみかけていた人

ひざを交えて語り合う機会を
互いに約しながら果せず

今は遠くはなれたその人に
私はどんな言葉でこの身悶えを表わせばよ
いのだろう

みずからをまず生かすことが
多くへの奉仕になることを
知らぬ筈もないその人に
私の繰りごとは還らぬつづて
もはやないその人に
語りかけたい強い想いが
せきとめようもなくあふれてくる。

実はアメリカの軍事基地化と引き換えに、天皇の戦争犯罪の免罪符として取引きされたものであることは、あまり知られていないのではないだろうか。

さて、敗戦時、中国東北部で親と別れた幼児は、一万に近いと言われる。これまでに来たばかりのいう棄児たちが、ざっと百人余として、なお親探しを希望する者が約九百人とすれば、合わせて千人、つまり一万人のたったの一分、あとの九千人はいつたいたどうなったのか。親と逸れたり、置き去りにされた子も、決して少なくはなかったらう。そして、飢えて死んだ子も――。

こんな悲惨とも無惨とも言いようのない、傷ましい話がある。

「中国残留日本人孤児が成田を飛び立った昨日、匿名の読者から長文の手紙を貰った。一歩間違えば自分も同じ運命を辿ったという体験の持ち主で、筆づかいからかなりお年の男性らしい。敗戦の年の九月、この人の一行は必死の逃避行を続け、ある開拓団の部落まで来た。部落に人影はない。と、井戸の中で子どもの泣き声をする。覗くと井戸は幼児で埋まっていた。水に漬かって大半が死んでいる。ただ子どもが多すぎ「水が不足」して、一人

終って会場の出口にさしかかった時に清水夫人が私のそばにきてささやいた。「朗読をきかされて始めてこらえていた涙があふれてきました。ありがとうございます。」
うまくない詩の朗読に御礼をいわれたのを私はよろこんでいた。 83・3・3

捨て子

宮田 正平

「中国残留孤児」という言葉が、ここ数年にわかに、そしてしょっちゅうマスコミで喧伝されるようになった。孤児というのは、両親に死に別れ、身寄り頼りのない子どもを言うのだと思っていたばかりは、中国に遺された幼い日本人を「中国残留孤児」と呼ぶことにどうしても馴染めず、ぼくの思い違いかと思つて辞書で確かめてみた。「両親に死に別れた幼児。みなしご。」（広辞苑）とある。
仮に、この「残留孤児」が便宜的な呼び名であるとしても、その子たちがもはや四十代の壮年であり、自分たちを育ててくれた養父母

だけが生き残っていたのだ。「何でもいうことを聞くから、お母さん許してよう、お母さん、お母さん。」一行の誰一人からも言葉が出ず、重苦しい沈黙が続いた。この人たちが自身、子どもを含めて、すべてを失っていた。食糧はなく、着のみのままシラミだらけ。明日の命も分からない。一人が顔をそむけて手榴弾を井戸に投げ込んだ。爆発音が子どもの泣き声をかき消した。

手紙はこの体験記に続いて当時の政府・軍・官・有力財界人の責任を衝き「政府が二度とこうしたことを起こさぬよう、反省をこめて孤児たちの将来を保障する諸施策を履行してもらいたい」と訴えている。来日した者のうち二十三人は夢を果たせず、傷心を抱いて帰っていった。「せめて私の名前と生年月日を教えて下さい」という言葉が悲痛だった。その背後から、無数の幼児の声が聞こえて来る。「お母さん、助けて、お母さん」と。
（三月十三日、赤旗・潮流、より）

足手纏いを理由に殺されかけ、奇蹟的に助かったという女性が、その時の咽もとの傷跡を指して、「あの時の傷がこうしてはつきり残っています。名乗り出て下さい、お父さん、お母さん」と涙し、また「いろいろな事情もあ

があり、結婚して子をなしている。ほんとに孤児ならば、手段を尽くして手掛りを求めて、実の父母との再会を期待して日本に来ることなどない筈である。中国に遺されたゆくてはどうであれ、彼等は棄児なのだ。「中国残留棄児」と呼ぶのが、むしろ正しい。

それでも両親を探し求めて来られる人達はまだまだいる。今度来た四十五人中、両親が既に死亡していることを確認できた人を含めて、二十二人が両親と、あるいは血縁と手を握り合えたことは、せめてもの救いであつたと思う。まだ九百人に近い棄児が生みの親との再会を希つているという。これからも彼等の親探しは続くだろう。しかし、もうやがて半世紀に近い時が流れようとしている。夢にまで見たであろう両親に、果してどれだけの棄児が会えるか、残酷なことを言うようだが、ぼくには甚だ心許ないことに思われてならない。すべては遅すぎたのだ。

ぼくは思う。これが沖繩返還の十年、いや十五年前にせめてこの「親探し」の問題に手が打たれていたらと、今更に詮ない思いに駆られる。ついでながら、沖繩がいわゆる「返還」された時、「戦後は終わった」と時の首相が胸を張って宣言した。しかし、この返還は

るでしょう。決してあなた方の生活の邪魔はしません。一目会って我子であると確めてもらうだけでいいのです。その願いが果せたら私は黙って中国に帰ります。」という痛ましい女性の姿もテレビが写していた。
それらを見、聞いていて、ぼくはやり場のない怒りをどうすることもできなかった。

戦後は、戦後処理は終つてはいない。
(1983. 3. 20)

詩集『おんなの本』と

鈴木文子さんのこと

吉田 欣一

何かと生きることは大変だ。格好つけて生きることもなんとやうと気が引けるが、食うと言うことが生きることと重なって、大変だ大変だと私を馳り立てる。景気が悪化して仕事量は少くなるし、気を抜くとお得意を競争相手に取られてしまう。商売上の借金を返せなくなる。そこで食えなくなる不安が六十八才になる私を、塗装工事の現場で刷毛を持つ

て仕事をさせることになる。馴れたことといえこ二ヶ月ばかりは疲れがひどい。

寝床の中で習慣になっている本を読むのが精一ばいで、詩を書く習慣もいさか弱って来ている。それというのも秋山清さんが言った(いい加減な作品を同人誌にのせて、われわれに何のよろこびがあるのか)ということに同感したばかりに、詩を書くことの難しさが一層身に沁みて、詩よ詩よと私はもがいているのである。そうした時に私を励ますように一冊の詩集が送られて来た。

鈴木文子さんの詩集「おんなの本」である。鈴木文子さんは名古屋で、はら・てつしさんの「確信犯」の出版を記念して開かれた会で逢った事があり、前からも文通していて、詩を書く娘がひとり増したという思いがあり、親しみを持っていた。

第一詩集として「鈴木文子詩集」をすでに出して、いわゆる労働者詩人としての作品を沢山発表しているのである。千葉県の野田市に住んでいて、東武鉄道で働き、私鉄文学集団の代表もやっているなかなかしっかりした娘だとの印象がある。

私のあまり好きでない「詩人会議」の常任委員もやっているし、多方面で活躍していて、

今が娘ざかり女ざかりといったところがある。四十二年に野田市で生れたというからいくつになるのか、勘定したこともない。

夫に死別して、そのことで人生の深いところを視つめて、おかめ、ひよつこの絵と詩集の中の作品「おかめ ひよつこ」を讀むと、おかめ、ひよつこに託した思いが、その舞台中央で踊る姿が

みんなへつらって生きているのだ
このすばらしい笑いは
共感の表現かも知れない
すつ裸で笑うことのできない依怙地が
舞台と会場を視つめて

おかめ、ひよつこの踊りから、踊っているのは自分かも知れない。それを視ているのも自分かも知れない、すつ裸で笑うことの出来ない依怙地がこの詩を書かせているように私には思われる。詩集の題名ともなっている「おんなの本」という詩は、鈴木文子さんの今の思いが良くわかる詩である。よきにつけわるきにつけて、ここに今居る作者の位置を私は見る思いがある。たとえばあなが

きに鈴木さんが書いている(組合のない谷底での人間社会では、自分を凝視する以外に何もすることがなかった。だが自分を視つめることによつて、今まで知らなかった自分という人間を発見することが出来た。こうしてはいられないと、書きだした作品が今回まとめた二五篇である)と見合うようにも思われる。

まつ裸の女たちが両手をひろげて
世間という名の綱を渡って行く
何処に行くのか長い行列だ
それぞれの顔をして
ぬるま湯にとびこんでいるのだ
世の中には
ずいぶん変わった本があるものだ
笑いをかみしめて
最後のページをめくっておどろいた
快樂の湯げにもたれている
私の女も描かれているではないか
そこには
男の梁がはさんであつた

鈴木文子さんが讀んだ「おんなの本」ということだが私はあまり「おんなの本」を讀ん

ではないが、宮本百合子さんとか佐多稲子さんの本は讀んでいるが、鈴木文子さんが否定するにしろ肯定するにしろ(自分という人間を発見しよう)とする方向性が、現実の新しい把握へ向つているとしても軌道修正を必要としないか、とふと思つたりしている。(自分という人間を発見しよう)とする鈴木文子さんの作品としては私は「自然の中で」を推したい。

(労働組合と係わつてきた年月の長さだけ、異性とばかり接してきたといつても過言でもない私にとつて、あまりにも同性を知らなすぎたのと、一人の組合員として、婦人労働者として自分を見た時「おんなの本」の中にいるいろんな女たちに通じるものが、良きにつけ悪しきにつけ私にあることに気づいたからである)とあとがきにあるが、ここが私は鈴木さんに語りかけたいところである。

「おんなの本」のいろんな女たちを見るな、とは言わぬが、婦人労働者としての立場にあくまでも自分を置いて思考の幅を拡げて貰いたいものである。

作品「旅立ち」という詩のところへ来て私はふと立ちどまった。この詩はおそらく、四年前の夫君の死と火葬場での状況をモチーフ

にしたものだろうが、「あつちへ行け/隠亡の鉄棒が命令する」という言葉に接した時に隠亡という言葉が何気なしにここに置かれたことは鈴木さんとしては他に表現の言葉が無かつたのか、他の思考が浮かびもしなかつたのか、私ならこういう言葉で表現しないことは確かだ、という思いがその日私を一日中暗くした。

「兵士の印鑑」という詩は娘から見た父親のことを理解しようとした詩として私も嬉れしくなる。戦争体験者として核兵器に反対する父と娘の、署名用紙に鈴木文子と書くのはたやすいことだ/という反省に立つて、「セイタカアワダチソウ」に託した反戦の詩は、そこるところで一つの鈴木文子さんの高みへ登ろうとする姿勢を見る。
「団結について」は団結という言葉によせてユーモアがある。

私の考えていた団結の意味は
寸たらずの者たちが
かこみの中に集つて結びあい
強くなること
最初の団結は
構えているかこみの蓋をあけ

寸たちが小手をかざして
東西南北に出かけている
からっぽになつた
かこみの中に投げこまれるのは
合理化、失業、パチンコ
などなど腐つたごみばかり

こういった作品のさりげなきの中に婦人労働者としての鈴木文子さんの詩を讀む楽しさがある。発行所はオリジン出版センター定価は一五〇〇円。

鈴木文子さんについてはもつと書きたいことが多くさんあるように思うが、走り書きで「ごめんさい。詩を書く親父が娘に向つて、これからは頑張りよ、といった気持ちで書いた。日本を不沈空母にするとかいつているが、そんなものの乗組員には絶対ならぬぞ、それにしても資本主義の社会にはいささか倦いた。みんなも疲れたのではないか。私は疲れた。それでも生きて行くためには死ぬまで働かねばならぬとは夢みる明日のためなのか。背負つた家族のためなのか。生きることは大変だ。

ある夏の日

押切順三

学校にはあれがある、
あれに気をつけろと自分に言いきかす
校庭いっぱい夏の日であった。
校門でそれを確かめる
神様らしい造りで大きなかんぬき、
その方を向いて止まる
直立する、
衣服のほこりを払ったりして
帽子をとって
深ぶかと頭を下げる。
背なかにも、頬にも
視線がとんできた、監視の目だ
役場の二階から

日暮れ

小宮隆弘

発狂しそうだと
散乱した事務机を
ひどくこぶしでたたく
（誰も信じてはいない）
覆いかぶさる書類の
さばききれない
未処理の紙片が
頸動脈に突き刺さり
悪夢にゆすぶられる夜
寝汗にぬめる疲労感に
夜明けにむかっておそい時を刻む

生け垣のすきまから

これから訪ねる校舎のガラス戸のなかから
わかっているのだ、

これが戦争の眼なのだ。

長い戦争がはじまっていた。

一九一八年生まれ

少年のころから戦争話ばかりであった、

いやだ、いやだと思いがち、

せいっぱい、努めて見せることを覚えた

おそれおおくと思う所作をこなした。

御真影奉安殿とよんだ、

紋章のついた写真が入っていた。

敗戦の夏、おおあわてで取り壊された。

私には、

少年からの思いが鉛毒のように染みている。

枕元の夜光時計の秒針

まだ五年もあるのに退職とは

それは惜しく

それはもったいない歳月ですよ

（やさしい慰めはいつものとおり）

定規で引いた同じ言葉

別れの言葉を職場において

あしたの日から物いわずとバス停を降りる

風強く桜の蕾ふくらみ

転がってきたコーラーの空罐踏みつぶして

鼻歌の一つもうたえぬ

われを憎み

桐箱に閉じ込める薬袋の

精神安定剤

睡眠薬

その残量をかぞえる

釣り競技

坂上清

マリンスノーが降りつづいている
夢の底 昏い深海へ
さらに下っていくと
ぼんやり明るい日ざしが
花嫁や少年やなど
人々の群をつゝんで
湧き上ってくる
遙かな海底に河面が光っている
魚たちが集っている
手に竿を持ち
人間を釣っているのだ
河面を通して雑沓が見える

勢いよく噴水が吹き上っている
どこのターミナルだろう

透明の釣針を垂し
胸や首すじをひっかけて釣上げる
痛みにもだえているのだが
叫んでいるのだが
誰もが素知らぬ顔
人々は逃げもしない
魚たちが噪っている
もうそろそろ引上げよう
まだまだ数が足りないだろう
そんなに獲っても捨てるだけだ
ルールはどうなっている
どうやら釣り競技をしているらしい

お父さん！

死んでるよ
子供の声でわたしは眼が覚めた
野球帽の父親がビクを覗き込んだ
みんな弱っているな
ヤマメはどうやら全滅だ
電車は多摩川の鉄橋を渡っていた

春梅譜

白梅が咲いている。
狭い庭のそこだけ春で
昼まえの丘陵地にくっついた
住宅街は閑散としている。
まさに目抜き通りだ。
バス通路のんだら坂を
まだ肌寒い風に首をすくめて

近藤計三

自転車で喘ぎのぼる。
五段切換歯車ギヤといっても
回転速度を増した俺の足踏みだけ
息せき切っている動悸ばかりせわしくて
加速度の器用な調整などは不可能だ。
やみくもにレバーをいれて
いくらペダルを漕いでも
まだ先が遙かにあるように
もう梅の花もない。
勾配の舗道だけがしらじらとして
いま貫ってきた胃痛の粉末菓が
ポケットでがさついている。
こいつが胸突き八丁の人生かと思ったら
俺の形相がひき吊って
ちよっと大げさに
ひさしぶりの深刻な一瞬に立ち合った気分
とまどいの冷汗が噴いてくる。
白梅のちいさい花が目にしみる。
紅梅はまだ固いつばみのまますくんでいる。

夜の橋

本田晴光

そこで ひと息入れたが
乾いた唇に 話しはとぎれた
引き潮どきの 水はゆるく
くらがりの向うに ひかれていった
葦の河原に 泥まみれの影が
ちぢれた声をたてて 笑っている
妖しく光っていたのは 男の額だった
ぶきみな音がして ぐっと沈んだからだが
二つに折れて見えた 確かに
あいつに違いなかった 投げ棄てられた記憶が
立ちあがってきて 睨みつけた
おい 俺を覚えてるか？
ききおぼえがあらう 俺の声だ
そんな とぼけたまねするなよ！

こっち向いたらどうだ まちがいなからう
忘れたなんて けちつけるな！
おい！ どうしたんだ
この野郎 耳のないまねしてるんか
そんなに せかんでもいい
俺も 隠れたりなどしないし
言いたいことは言え ききたいことはきくは
少し 足をずらして
のめりこんだ位置を わずかに移した
やっぱり お前だ
まちがいなく 俺だ
そのところを 確かめあった
お前が 俺を
俺は お前に
殺し 殺されあったまま
それっきり 別れたところをかくしたが
青い雨の降る夜には 刺した手首が
刺された背中が 割れるのだ

三月の陽射しを浴びて

高島 洋

むくんだ夢が 歩き出すのだ
くらいやみが だんだん小さくなり
それから 俺の墜ちていく先が
まっかな火に 包まれていたのに
尻をまくった お前の
すばやい 逃げ足
とうとう お前をやみに消したが
俺もそれっきり 風に吹かれてきたよ
なんてままならない 世の中だろうと
歯ざしりしたんだが さっぱりだった
今夜は 妙に陰気くさく
湿った風のひとり言でも きこえそうで
ふらっと出てきたが 会えてよかった
そう 堅苦しい顔をするなよ！
まあ 一ぶくつけろよ

生后一年十ヶ月の男児
わたしの孫よ
あどけない口舌は、まだ言葉にならぬ
腕白なおまえを乳母車にのせて
わたしは着ながしで公園に向う
三月の陽射しを浴びながら

向うから
あかいちじれっ毛、太いズボンの中学生たちが
一団になってぞろぞろあるいてくる
（大人たち競争社会の反映だろうか
教室のなかの格付序列
青春への旅立ちも
はじめっから落ちこぼれの屈辱）

彼らはすれちがい、行きすぎてゆく
ケンカやったら負けへんで
肩をゆすって
自暴自棄のスタイルであるく

孫よ、成長して
中学生になったとき
その重圧に耐えかね
苦しませの刃を
老いさらばえたわたしに向って
つきつけるだろうか
うつろな眼を見据えたまま

孫はいま、乳母車のうえですこぶる機嫌が良い

「イトウ」と言う魚

野口清子

今はまぼろしの魚になっていると言っ

「イトウ」という魚を追って
男が二人 沼から沼へ
水の流れをたどっている

いくつもの流れを渡って
網にかかった イトウは
氷の箱に積みこまれ
水産試験場へ

たくさんのイトウの卵が
米粒のように あふれる
稚魚の数

冷たく澄んだ沼に散る
流れにのるのもいる
すぐ同類の餌食になるのが大半

今はまぼろしの魚になってしまったと言っのに
胸まである イトウを捕った男の
自慢気な顔がある

さけ科の魚たちの 故郷の川に戻ってくる
習性

晩秋の強い日射しをあび
群をなし 先きをあらそい
川の流れに ジャンプする
さけたちにまじって
成長した「イトウ」がいた
故郷の川 故郷の川 故郷の川
ひたむきに とびこんでくる
魚たちを
いとおいしい想いで贖める

海を渡る鳥

—— その二 ——

河合俊郎

鳴き声もたてず

羽音もなく

浜藪の枯れ枝に集合した小さい鳥たち
見てくれといわんばかりに胸をはり
得意のポーズをとる気取りツグミの出発だ
秋に日本へ渡ってきて
春まで人間の庭さきの下草をかきわけ
ツツととび歩いているうちに単独になり
群は分散して山中に入るもの耕地に下るもの
人間をみると「クワックワッ」と絶叫しつつ
あちらに逃げこちらに走り日が暮れて
いつも黙っていつてしまっておまえ
待ってくれ!
だあれもふりかえってくれない空と海
午前十時
尾羽根をしごき方向をみさだめるとおまえは
ひとり海原へむかってとび立つ

コスモス

仙石まこと

今の裏側はやモリでいっぱいである
特別観測のミニコミ薬局では
クロロマイセチンをチンポコに塗る
騒げば一またぎ
風と雲
雪と光

マイシテイのゼラチン高速道では
眼鏡と百円ライターがセックスしている
かぶれ 深々と
日暮し人間ローソクマン
テングーサロンの毒麦となるべし

ど・どけ 光れ

山頂の海底ハゲ將軍
逆転一発サラリーマン
納豆航路は石狩平野をレイプする
感動のノンセックスロマン

シヤングリラのティッシュ・ペーパーは
暴発強力粘着剤
ああ 夢見がちな老人仮面よ
おっぺしよれよ！
あながちの鉄砲昼食は
コキユア・メアドのフルコース

迷宮入りのピエロ殺人事件は
亡命中のガブリッチョ・ウンペラモーゼ伯の
尿道にマイマイカブリがもぐりこむことによって
かろうじて解決となる
忘れることだ

トンネル画廊のフロイド諸君

手袋をとりたまえ パンツを脱ぎたまえ
さあ きみは いま
さあ きみは いま
いよいよ いまこそ
あのガンモに目をつける

あんがと ガトよ

歌麿的湿原に
スペース・シャトルが今降りたった

マカール テハール 冬存偽臭
ギョロタ郡クワセ町大字ニシメ字コイツ三本松

人形錦の浅草福富甚五市に
早朝電波管理事務局が発足してからは
友川河内之助種古神稲荷は
北極の青ガラスと化した

飛べ 新体操花子よ

煮込み太郎の代役として
雲上怪談差入れ奇門のはるかかなた
カルナバルのザメンコフ囚を解放するために
飛べ 映像部門サンパよ

ローマ字のたくさん出る話

寺島珠雄

すっかり禿げていた。

おれなんか勝負にならぬ具合だった。

そいつは階段をのぼってきた。

降りていったおれが気付いたのは位置が逆になっ

てからだった。

振り返って少し仰角に肩の線を確認した。

大阪 私鉄ターミナル駅中央口 夜。

やつはS・H おれより一つ若い広島生れ元特攻

隊 元K組中幹部 これは聞いたこと。

D自動車主力工場建設下請飯場の古参土工。
出世して手配師。

——大阪駅に降り立ってまごまごしている出稼ぎ者や家出人らをねらう……「○○建設」と銘打つ作業員宿舎へ送り込むのだ。宿舎の「親方」はさらに大手建設会社の孫請けあたりを送る。

——登場は、二十八年ごろから……万国博後の四十五〜四十八年はピークに達した。駅構内に常時四、五十人が立ち並んだ。四十五年中の検挙者は、最高の延べ百五十七人に及んだ。いまでも、構内には常時十人ぐらいがたむろする。『大阪駅物語』弘済出版社)

やつの活躍はこのピーク以前のピーク時。
やがて親方となる。

ここいらは現に見た。

もう十五年も前になるか。やつの「宿舎」人夫出し飯場」の連中といっしょに仕事したこともある。あれはK企業団地造成工事。

それから知らない。

すっかり禿けてしまっ

はでな上衣を着て

ゆがんだ肩の線は相変らずに

階段をのぼって行った男。

かりにやつの方でおれに気付いたとして

声をかけてきたろうか。

どないしとんのや シケとるんやったら わしと

こへ来てくれへんか など。

S・H——

やがて花見時季。

S山の花見は思い出深すぎるがおたがい三十代に

は戻れぬのよ。

さよなら。

宮田正平

季節風

吹き荒れた風がぱったりやんで
きょうは 麗かな晴れ

どこからどう入りこんだのか

雀が屋根瓦の間に住みついている

産卵が近いのか 二羽三羽

枯枝を 枯草を

運ぶのに忙しい

寒椿はとうに花をおとして

白梅の 沈丁花の

蕾が ぶっくりふくらみ

ふと横目でテレビを見る

海峡封鎖 不沈空母 運命共同体

牽強付会 野党の追求をかわして

言葉巧みに 強気の答弁をしている

元大日本帝国の海軍少佐

今右翼軍拡の番長

国民の支持率 16%

(1983・2・21)

袖の墨

さりげない目くばせに

それと気づいた時

彼は パツと頬を染めた

嬉しさと羞らいに

目が澄んで輝いた

永生きしたい

(1982・7・19)

「広島の日」を 「長崎の日」を

嘲笑うかのよう

核爆弾の地下実験が

四十五億の顔を逆撫でしようと

小さくささやかな

想われる欣びが

慕われる幸せが

夜となく昼となく

宇宙の一粒の星 地球の

そのあちこちの片隅で

あらゆる命の母 海の

数知れぬ砂の数ほどにも

芽吹き 育っている

(註) 袖に墨つく人恋慕される時には、
袖に墨がつくという諺によっている。人

に恋慕される兆。(広辞苑)